

# セブアノ語を母語とする日本語学習者の 母音知覚に関する予備的考察

丸島 歩

## 要 旨

セブアノ語は固有語では3母音体系を有し、フィリピンでタガログ語に次いで母語話者の多い言語である。本稿ではセブアノ語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語の母音の聞き誤りについて予備的な考察を行った。

特殊拍の誤りが最も多く、次いで母音の誤りが多かった。特殊拍の誤りは母語を問わず見られるものであることから、母音の誤りは本稿で扱った学習者に特徴的なものであると言えるだろう。母音の聞き誤りのほとんどはイ段・エ段間、ウ段・オ段間に見られたが、その誤りの傾向には個人差が見られた。本稿では3名の学習者について考察を行ったが、1名はウ段・オ段間、特に拗音をともなう音で誤りが多かった。他の1名は半狭母音を聞いた際に狭母音と判断する誤りが多かった。もう1名は母音の聞き誤りが少なかった。

フィリピンは多言語国家であるが、フィリピン諸語で日本語よりも母音が少ない言語はほかにも多く存在する。セブアノ語以外を母語とする学習者や、母音の発話の面からの検証も必要であると考えられる。

## キーワード

フィリピン人日本語学習者 セブアノ語 ビサヤ語 母音知覚 聴取

## 1 はじめに

現在、留学生として日本に訪れているフィリピン人は1000人ほど [日本学生支援機構 [online: index.html](http://online.index.html)] で、留学生全体のわずか0.5%であり、それゆえ教育機関で日本語を学んでいる学習者も少ない。その一方で、日本に在留しているフィリピン出身者は約23万人、在留外国人の1割にものぼる [法務省 [online: nyuukokukanri04\\_00057.html](http://online.nyuukokukanri04_00057.html)]。フィリピン国内での日本語学習者も増加傾向にあり (国際交流基金 2013, pp.52-53)、フィリピン人の日本語学習に対する潜在的な需要はあると考えられるが、日本語指導に関する研究はあまり進んでいない。

また、フィリピンの日本語学習者はコミュニケーション志向が非常に高く (片桐 2005、国際交流基金 2013, pp.52-53)、正しい発音に対する意識も高い (片桐 2005) もの、音声指導に関する研究は筆者の知る限り、ガリエーゴ (2011, 2012) 以外に見られない。

### 1.1 フィリピンの言語と母音体系

フィリピンの言語といえば国語であるフィリピン語（実質はタガログ語<sup>1</sup>）が想起されるが、タガログ語を母語とする者はフィリピン国民全体の3分の1 (Brown and Ogilvie (ed.) 2008, p.1035) ないしは4分の1 (金 2004) と言われており、母語話者数第2位のセブアノ語と大差ない。フィリピンは多言語国家であり<sup>2</sup>、多くは第二言語としてタガログ語を使用している。

タガログ語の単母音は /i/, /e/, /a/, /o/, /u/ の5つであるが、/o/ と /e/ はスペイン語の影響である (Brown and Ogilvie (ed.) 2008, p.1036)。フィリピンでタガログ語に次いで母語話者の多いセブアノ語は、借用語によって /e/, /o/ も用いられるものの、基本的には /i/, /a/, /u/ の3母音体系である (亀井孝ほか (編) 1989, p.444, Brown and Ogilvie (ed.) 2008, p.198)。その他、比較的母語話者数の多いフィリピンの言語の音素としての母音数は、カパンパンガン語が5母音、イロカノ語が4母音、ヒリガイノン語、ビコル語が3母音、サマル・レイテ語 (ワライ語) は3 (方言によっては4) 母音で、比較的母音数が少ないものが多い (Brown and Ogilvie (ed.) 2008)。

### 1.2 母語の母音体系と日本語学習

母語話者に日本語学習者が多い中国語、インドネシア語、朝鮮語 (韓国語)、英語、タイ語、ベトナム語等は日本語よりも母音数が多く、日本語の母音の聞き分けや発音について問題になることは少ない。しかし、3母音体系であるアラビア語を母語とする日本語学習者が日本語の母音を混同する現象がこれまでも指摘されており (助川 1993、国際交流基金 2009, pp.11-12)、母音数の少ないフィリピンの諸言語を母語とする学習者も、このような現象が起こる可能性が想定される。

現に筆者は現在、セブアノ語 (ビサヤ語) 等を母語とするフィリピン人を含む留学生に日本語を教えているが、フィリピン人学生の中に日本語の母音の知覚や発音に対しても混同が多いと感じる。特にイ・エ段、ウ・オ段で顕著である。

### 1.3 先行研究

フィリピン人日本語学習者に対する研究はそもそも多くない。タガログ語を母語とする学習者や、母語を限定せずに「フィリピン人」を対象とした学習者の音声研究として、ガリエーゴ (2011, 2012) が挙げられる。ガリエーゴ (2011) ではアクセントの指導が母音の長短の産出を改善するかを調査している。日本語の高低アクセントを指導することで短母音の長音化はある程度改善する可能性が示されている。ガリエーゴ (2012) ではフィリピ

<sup>1</sup> 亀井ほか(編)(1992)の「フィリピン語」の項参照。

<sup>2</sup> 亀井ほか(編)(1992)の「フィリピン諸語」の項では、120言語が扱われている。それらの全ての語がオーストロネシア語族のヘスペロネシア語派に分類されている。

ン人の日本語初級学習者を対象に、母音の長短が正しく知覚されるかどうかを観察している。総じて正解率は高かったが、ピッチ変動が現れる位置が長母音の判断に影響を与えていた。

これらは母音の長短の知覚や発出、アクセントを扱っており、母音の同定や区別には触れられていない。そもそも5つの母音を持つタガログ語母語話者には、そのような問題が起こることは少ないと考えられる。また、フィリピンのタガログ語以外を母語とする学習者を取り上げた研究も見られない。

## 2 目的

本研究では、セブアノ語を母語とする日本語学習者（以下、セブアノ<sup>3</sup>日本語学習者）を対象とする。学習者の母音の混同は知覚と産出の両面から観察する必要があるが、まず本稿では、日本語の母音をどのように知覚しているのかを観察することとする。

## 3 方法

### 3.1 学習者

日本国内の予備教育機関でセブアノ日本語学習者3名を被験者とする。3名ともが第一の言語はセブアノ語であると申告した。各被験者の情報は以下表1の通りである。セブアノ語・日本語以外の言語のレベルは自己申告である<sup>4</sup>。なお、全員が母国で150時間程度日本語を学習してから来日し、半年ほど日本で日本語を学習している。レベルは初級後半程度である。

表1 各学習者の情報

	性別	年齢	母語以外の言語
C1	女性	20代	タガログ語 (native or bilingual)、英語 (fluent)、日本語 (初級後半)
C2	女性	20代	タガログ語 (native or bilingual)、英語 (fluent)、日本語 (初級後半)
C3	女性	20代	タガログ語 (fluent)、英語 (intermediate)、日本語 (初級後半)

### 3.2 実験資料

クラス内ではほぼ毎日実施される語彙テストを実験資料とする。テキストとして使用している『みんなの日本語 第二版 初級 I・II 本冊』とその補助教材である『みんなの日本

<sup>3</sup> セブアノとは言語名を指すと同時に、セブの人々を指す語でもある。

<sup>4</sup> 1.native or bilingual, 2.fluent, 3.intermediate, 4.basic の4レベルから選択させた。

語 第二版 初級 I・II 翻訳・文法解説<sup>5</sup>』に掲載されている各課の語彙を用いた。ほとんどが単語であるが、まれに短い会話表現も含まれる（「お大事に」「失礼します」、など）。前半の第1～25課は各課を1回ずつ行ったが、第26課以降は2回ずつ行った。また、25課と26課の間に、まとめとして1～5、6～10、11～15、16～20、21～25、1～25課を範囲としたテストを1回ずつ行っている。どのテストも1回につき10問を出題する。日本人教師が数回ずつ設問を読み上げ、学習者がそれを聞き取って記述する。回答を行う際は、カタカナで書くべき語はカタカナ、それ以外はひらがなで記述し、漢字のみでの回答は正答としないことをあらかじめ伝えてある。1つの課につき2回のテストを行っている場合に、出題語彙の一部が重複した場合があった。なお、クラス運営の都合上、全てのテストが記録できたわけではない。48回分のテストを記録しており、それを資料とした。

学習者はあらかじめ出題範囲を知っているため、丸暗記すれば聞き取りが正確にできなくても正答できるが、実際には母音の混同から来ると思われる誤りがかなり見られた。

### 3.3 解析方法

記録してあるテストの解答用紙から、誤りをすべて記述し、整理した。ただし、字形の誤りやひらがなで書くべきものをカタカナで、もしくはその逆で書いてしまったという誤りは除外した。1つの語彙で複数の誤りがあるものは、それぞれの誤りを1つとカウントした。例えば、「もうすぐ」を「もすご」と誤答した場合、以下の表2のように分析した。

表2 誤答分析の例

正答	誤答	誤り
もうすぐ	もすご	長音の脱落
		母音 (u→o)

さらに、そこから母音の誤りを抽出し、どの母音とどの母音を混同しているのかを整理した。また、混同がみられた音節の位置を「語頭」「語中」「語末」の3パターンに分類した。

## 4 結果

### 4.1 誤り全体の傾向

3名、48回分のテスト（計480問）のテストで、全ての誤りの数は275個<sup>6</sup>であった。誤りを分類した結果を以下の図1に示した。その中で母音の誤りと分析された誤りは72個で、

<sup>5</sup> 被験者であるセブアノ日本語学習者は、英語版を使用している。

<sup>6</sup> 3.3で述べた通り、一つの誤答の中にいくつもの誤りが含まれている場合が多いため、誤答の数とは一致しない。

全体の26%にのぼった。そのほか、清濁の誤りが25個<sup>7</sup>、清濁以外の子音の誤りが15個<sup>8</sup>、長音の誤りが103個<sup>9</sup>、促音の誤りが25個、撥音の誤りが7個であった。そのほか、長音と促音を混同する、母音連続を一つの母音と認識するなどの誤りが見られた。全体的には特殊拍に関わる誤りが多く、全体の半分程度を占めているが、これはセブアノ日本語学習者に特徴的な誤りとは言えず、比較的日本語学習者全体に起こりやすいものである。したがってここでは特に問題にしない。

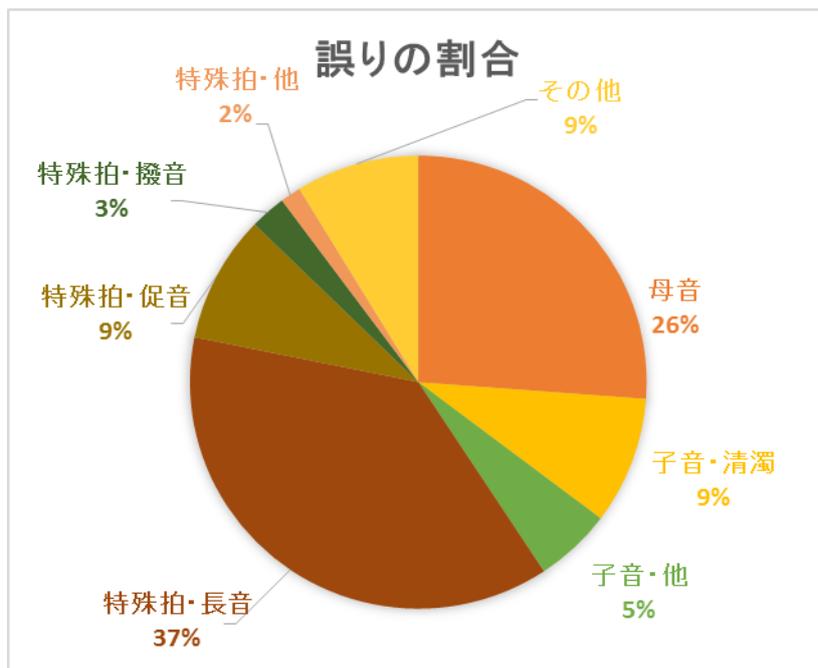


図1 誤りの種類とその割合

#### 4.2 混同が起きやすい母音

どの母音をどのように誤ったのか、全ての母音の誤りを分類したところ、以下の図4-2のようになった。ウ段とオ段、イ段とエ段の混同が多い。特にウ段とオ段相互の誤りが特に多くなっており、イ段・エ段間の誤りの3倍ほど多い。

また、それ以外の誤りはわずか4%であった。したがって、本稿ではウ段とオ段、イ段とエ段の誤りを中心に分析していくこととする。

<sup>7</sup> 清音と濁音、もしくは半濁音の誤り。濁音を清音にしているケースが圧倒的に多く、聞き誤りだけではなく、濁点の書き忘れというケースも含まれていると思われる。

<sup>8</sup> 摩擦音と破擦音を混同するケースが多かった。特に拗音での誤りが多いので、シャ行とチャ行の表記が完全に身につけていないだけということも考えられる。

<sup>9</sup> 長音のない位置に長音を示唆する表記(ひらがなで書くべき語であればア行の仮名、カタカナ語は「ー」)が書かれていたり、もしくはその逆であったりする場合。また、長音の位置を誤った場合も含んでいる。促音、撥音についても同じ。

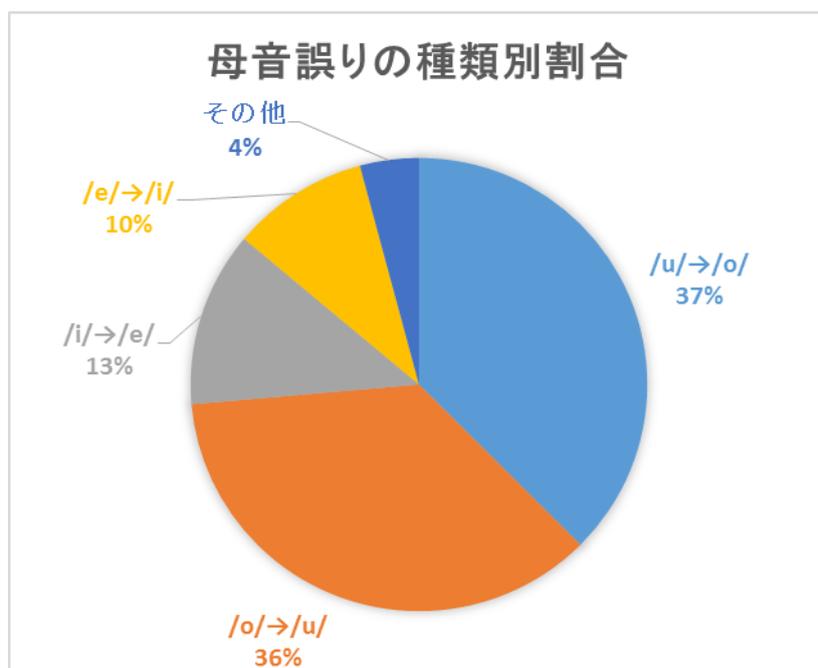


図2 母音誤りの種類と割合

しかし、上の図2の割合だけで誤り同士の単純な比較はできない。そもそも出題されている語彙に含まれる母音は、均等でないからである。分析に用いたテストの設問に出現する母音の総数をそれぞれ計上すると、ア段が483、イ段が401、ウ段が385、エ段が159、オ段が292で、偏りが見られる。これを考慮した上で、出題された語彙に含まれる母音の総数における誤りの割合を算出した<sup>10</sup>。それが以下の図3である。イ段・エ段間の誤りに比べてウ段・オ段間の割合が高くなっているが、狭母音を半狭母音に聞き間違える割合よりも、半狭母音を狭母音に聞き間違える割合の方が高い。

<sup>10</sup> 欠席等のため、3名ともが全てのテストを受けたわけではない。欠席してテストを受けていないものは算出から除外し、より正確な数字を導いた。

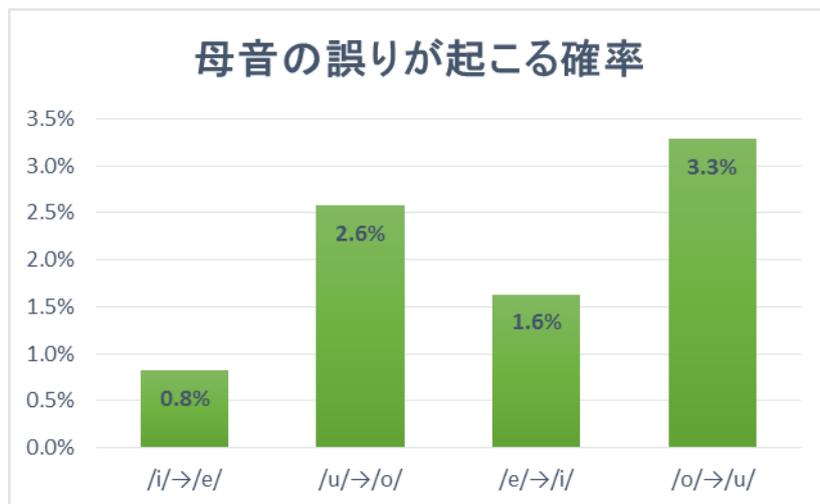


図3 母音の誤りが起こる確率 (種類別)

さらに、被験者ごとの傾向を見るために母音の誤りの出現率を算出した(図4)。被験者C-2はそもそも母音の誤りが少なく、どの項目も1%未満である。また、被験者C-1はウ段・オ段間での誤りが多く6%ほどであるが、イ段・エ段間の誤りは1%台である。なお、被験者C-1のウ段・オ段間の誤りは39件であるが、そのうち17件が拗音での誤り<sup>11</sup>であった。被験者C-3は狭母音を半狭母音と判断する割合は1%未満であるのに対し、半狭母音を狭母音と判断した割合が4%近い。以上のことから被験者別に見るとその傾向は分かれることが観察できた。

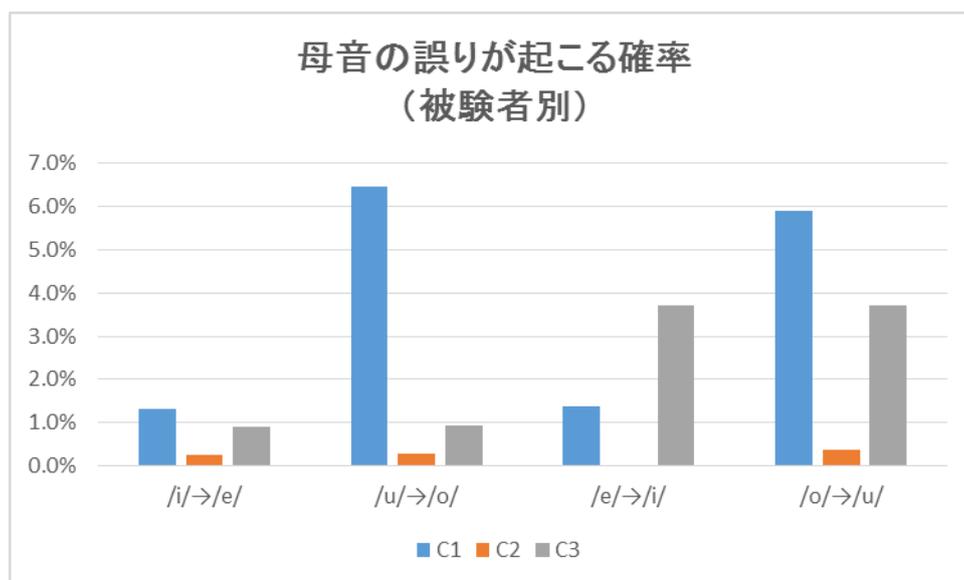


図4 各被験者の母音誤りの出現率

<sup>11</sup> なお、被験者C2には拗音での母音の誤りはなく、C3はわずか3件である。

### 4.3 母音の誤りと位置環境

母音の誤りが語句のどの位置で起こりやすいのか、語頭、語中、語末に分類した。なお、件数で単純な比較はできないので、誤りが起こる割合で算出した。また、促音や撥音は母音が含まれないので母数から除外し、長音は 2 モーラを一単位と考えて分類、計上を行った。3 被験者全てのデータから算出したデータが、以下の図 5 である。語中>語頭>語末の順になっているものの、どの位置も 1%台で大きな差は見られない。Fisher の正確性検定を行ったところ、p 値は 0.8422 で、有意差も認められなかった。

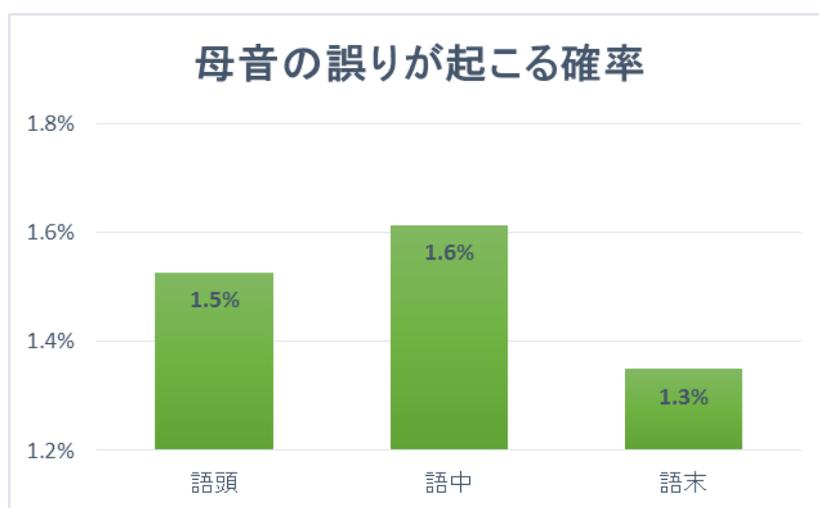


図 5 母音の誤りが起こる確率 (位置別)

次に個人差を見るために、被験者ごとに分類したデータを提示する。そもそも母音の誤りが少ない被験者 C2 については除外する。被験者 C1 は図 6 に、C3 は図 7 にそれぞれ結果を示す。

被験者 C1 は語頭での誤りが最も割合が高く、語末、語中と続く。被験者 C3 は語中での誤りが最も割合が高く、次に語頭、最も低いのが語末である。それぞれについて Fisher の正確性検定を行ったところ、C1 の p 値は 0.6632、C3 は 0.2575 で、いずれも有意差は認められなかった。2 被験者の傾向は一見同じではないが、位置ごとの差はそれほど大きくはなく、違いがあると断定はできない。

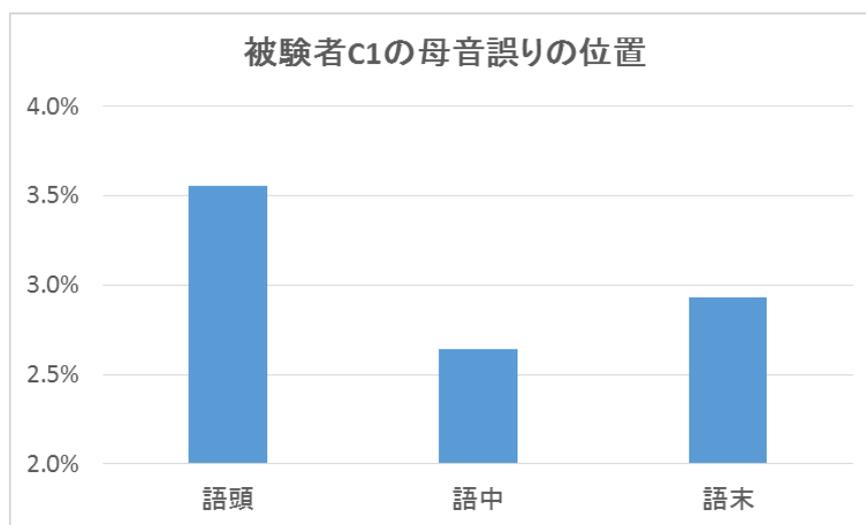


図6 被験者 C1 の母音誤りが起こる確率 (位置ごと)

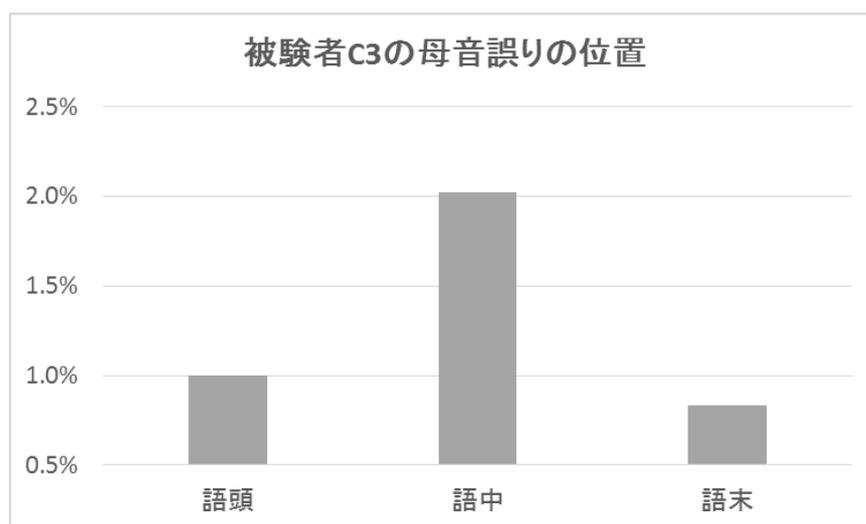


図7 被験者 C1 の母音誤りが起こる確率 (位置ごと)

## 5 考察

本稿ではセブアノ日本語学習者の母音の聞き取りの誤りについて検証した。セブアノ語は基本的に3母音体系であり、/o/ と /e/ は借用語にしか存在しない。母音の聞き取りに誤答が発生することを予想して検証を行ったが、語彙のディクテーションテストでは全ての誤りのうちの4分の1が母音に関する誤りで、特殊拍に関する誤りを除けば最も数が多かった。したがって、母音の聞き誤りは無視できない頻度で発生すると考えて差し支えないだろう。

また、ウ段・オ段、イ段・エ段間での誤りが多くなっていた。セブアノ語には基本的に /o/ と /e/ が存在しないため、オ段やエ段の音が正確に聞き取れず、ウ段やイ段と混同してしまったためと考えられる。予想どおり、母語の母音数の少なさによって、日本語の母

音の聞き取りに問題が生じていると見られる。

フィリピンは英語が公用語の一つであり、国民の多くは英語が母語ではないものの、堪能であると言われている。本稿の被験者も英語で他の学生や教職員との日常的なコミュニケーションを行う場面が多く見られた。英語学習の経験が日本語の母音の知覚を助ける可能性も考えられるが、必ずしもそうであるとは言えないということである。そもそも英語学習においても母音の同定や区別に問題が生じている<sup>12</sup>のか、英語の母音はうまく習得できているもののそれが日本語学習に生かしきれていないのか、複数の可能性が考えられる。これについては別の検証を行う必要があるだろう。

母音の誤りについて、個人差が多く見られた。母音の誤りが多い学習者と少ない学習者が観察された。また、それぞれに誤りの特徴も異なった。3 被験者それぞれの特徴を以下の表3にまとめる。

被験者 C1 はウ段・オ段間での誤りが多く、特に拗音での誤りが目立つ。拗音は直音に比べて複雑な表記システムであるため、母音の聞き間違いだけではなく表記が身につけていないが故の誤りも含まれるという可能性も否定できない。しかし、直音での母音誤りも多いことから、この被験者はウ段・オ段音の区別と拗音の表記システムについて、複合的に見直すような指導が必要であると考えられる。被験者 C3 は半狭母音が提示された際に狭母音を記述してしまう誤りが多い。セブアノ語には基本的に /o/ や /e/ の母音が存在しないため、母語に存在しない母音を聞いた際にそれに近い母音を当てはめてしまっている可能性がある。また、被験者 C2 のように母音の聞き取りに大きな問題のない学習者も見られる。一口にセブアノ日本語学習者と言っても、それぞれが持つ日本語母音の知覚の問題には相違点があり、個々の学習者を観察する必要があると言えるだろう。

表3 各被験者の誤りの傾向

被験者	特徴
C1	ウ段・オ段間の誤りが多い。拗音での誤りも多い。
C2	母音の誤りは少ない。
C3	半狭母音を聞いた際に狭母音で回答してしまう傾向がある。

語句内の位置によって母音の誤りの出現率が変化するかどうかについても分析したが、有意な差は見られなかった。母音の誤りは特定の位置に偏るわけではないと考えられる。

## 6 今後の展望

本稿では、語彙のディクテーションテストを用いて誤答の分析を行ったが、全てが音の

<sup>12</sup> 本稿で扱った被験者は、教員である筆者に対しても断片的に英語を使う場面があるが、“scanner”を [ˈskana] のように発音したために、何を言っているか理解するのに時間がかかったということがあった(なお、アメリカ英語での発音は [ˈskæənə] である)。

聞き取り間違いが原因の誤答とは限らない。特に濁音を清音として表記してしまう誤りは、濁点の書き忘れである可能性も高く、今回の被験者は日本語の表記システムが完全に定着しているとは言えないだろう。例えば、無意味語音声とひらがな・アルファベット併記のアンケート用紙を用い、母音の聞き取りのみに焦点を当てた実験を行うことで、母音の同定・区別の能力をより正確に把握できると考える。

また、実際に彼らの発話を聞いていると、ウ段とオ段、あるいはイ段とエ段が区別できていないと思われる発音によく出会う。したがって今度は同様の被験者の日本語音声を解析することで、発話面から日本語母音習得の問題にアプローチする必要がある。知覚と発話双方の誤りの傾向を明らかにすることで、聞き取りと発話の関係性について新たな知見が得られるだろう。

本稿では3名のセブアノ日本語学習者を対象に分析を行ったが、その特徴は個々に異なるものだった。母音の誤りというある程度共通した問題はあるものの、誤りの傾向などには違いが観察された。さらに多くの被験者のデータを解析することで、異なる傾向が見出される可能性がある。今回はセブアノ語母語話者のみで検証したが、ほかのフィリピン諸語を母語とする学習者でも、同様の傾向が見られる可能性がある。フィリピン諸語を母語とする学習者をより幅広く観察することで、より詳細な傾向が観察できると思われる。筆者は本稿で用いたデータを得た際に、カンカナウイ語とイロカノ語を母語とする学習者1名のデータも採集している。この学習者はイ段・エ段間の誤りが多い傾向にあったが、詳細な分析結果については、別稿に譲りたい。

本稿で被験者間に誤りの相違点が観察されたが、実際の音声教育の場面でどのように指導を行うべきであろうか。本稿の実験であれば、C1は拗音を中心にウ段とオ段の発音と表記システムを定着するまで練習させるような学習が必要であるだろうし、C3はエ段やオ段音の同定ができるようになるような学習が必要であると思われる。C2に関しては、母音の聞き取りに関して大きな問題はないので、特に母音に焦点を当てた教育は不要であろう。どのような学習者にどのような学習が有効であるかについても検証すべきであろう。

前述したように、日本に在留しているフィリピン出身者は多く、フィリピン人日本語学習者も近年増加している。それに対してフィリピン諸語を母語とする日本語学習者に関する研究は少ない。音声に関する研究も非常に少ないが、フィリピンは多言語国家であるため、その実態は非常に複雑であると考えられる。本稿で残された問題とともに、今後の課題としたい。

#### 参考文献

- Brown and Ogilvie (ed.) (2008) *Concise Encyclopedia of Languages of the World, 1st Edition*, Elsevier Science
- 片桐準二 (2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Belief—フィリピン大学日本語受講生調査から—」『国際交流基金 日本語教育紀要』1, pp.85-101

- 亀井孝ほか (編) (1989) 『言語学大辞典 (第2巻) 世界言語編 (中) さ-に』 三省堂
- 亀井孝ほか (編) (1992) 『言語学大辞典 (第3巻) 世界言語編 (下-1) む-ほ』 三省堂
- ガリエーゴ ニーニャ (2011) 「タガログ語を母語とする日本語学習者の産出に見られる母音の長短とアクセント」 『国際協力研究誌』 17-1, pp.71-88
- ガリエーゴ ニーニャ (2012) 「フィリピン人日本語学習者の母音長の知覚」 『国際協力研究誌』 18-3, pp.137-147
- 金美兒 (2004) 「フィリピンの教授用語政策—多言語国家における効果的な教授用語に関する一考察—」 『国際研究フォーラム』 25, 99-112
- 国際交流基金 (2009) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ 第2巻「音声を教える」』 (ひつじ書房)
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』 (くろしお出版)
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」 『日本語音声と日本語教育』 pp.187-222
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級I 第2版 本冊』
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級I 第2版 翻訳・文法解説 英語版』
- スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語 初級II 第2版 本冊』
- スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語 初級II 第2版 翻訳・文法解説 英語版』
- 日本学生支援機構 「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2015/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html) (2016年8月15日)
- 法務省 「平成27年末現在における在留外国人数について (確定値)」  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00057.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html) (2016年8月15日)
- (丸島歩 国際医療福祉大学)

# A Preliminary Study on Perception of Japanese Language Vowels: Native Cebuano Speakers Learning Japanese

MARUSHIMA Ayumi

It can be assumed that native Cebuano speakers who are learning the Japanese language have trouble in differentiating the different Japanese vowels. This is because the Cebuano language has only three vowels: /i/, /a/, and /u/.

This study aims to observe the method by which Cebuano native speakers recognize Japanese language vowels.

I recorded and analyzed the data of three learners through the word quizzes on which they took dictations. The result shows that some of them find it difficult to differentiate /o/ from /u/ and /e/ from /i/; however, this depends on the abilities of the individuals.